



衣川 健一

『金屋子神 (かなやごのかみ) 降臨の地』



金屋子神の降臨



穴栗市の山々

岩野辺の人々はここを「山の神」と呼んで神聖視してきた所です。元来、岩野辺の縁故地であり周囲の山々と同様に一反五畝歩の分割地として個々が管理しています。谷川に面した所に桂の老木が茂り、根元に小さな祠がお祀りしてあり、人々はこれを「金屋子 (かなやご) さん」と言って丁寧に扱いお祀りしています。

岩鍋から白鳥に乗って西方に向かった金屋子神が到着した出雲地方の人々は「我々の元祖だ。」「ルーツはここか。」と言って今でも一年に二組や三組は見に来たり、お参りしたりしています。その地に祀られた「金屋子神社」ー島根県能義郡広瀬町西比田 (現在は安来市広瀬町) ーに興味深い祭文 (のりと) の言葉が残っています。

「播磨ノ国の志相 (穴栗) 郡岩鍋に、高天原より一はしらの神天降り坐す有り。人民驚きて如何なる神ぞと問ひまつる。時に神告げて曰く、吾は作金者 (かなたくみ) 金屋子ノ神なり…五穀豊穰のために盤石を以って鍋を造り賜ふ。是に依って彼の地を岩鍋といふ。以下略」。

岩鍋は現兵庫県穴栗 (しろう) 市千種町岩野辺 (いわのべ) で、千種はもと千草と書き「播磨国風土記」には敷草の村と記されています。「鉄を生す」とあるから古くから製鉄がおこなわれていたことが分かります。岩野辺にはつづら尾という小字があってそこは千種で、もっとも古く鉄をとったところと言われています。『千草鋼』や『穴栗鉄』の名は備前の刀工達に愛用され、中世には有名ブランドとして知れ渡っていました。

岩鍋の岩は堅い物につけられる名で、天岩楠船 (あめのいわくすぶね) は堅い楠材の船である金属も石または岩と呼ばれた。「古事記」の天の石屋戸の条に、「伊斯許理度売 (いしこりどめ) に科 (おほ) せて鏡を作らしめ、」とある。イシゴリどめは石樵戸女 (いしこりとめ) で、石樵は金属を精錬することです。千種町の東に伊和町があり、伊和神社が鎮座しています。祭神は伊和大神ですが、この伊和も金属を表すものでしょう。

祭文の中に盤石 (かたいし) を以って鍋を造りとあります。今、千種中学校では毎年砂鉄を採集して『たたら製鉄学習』を行っています。又、千種町には大字黒土がありいかにも砂鉄が堆積したと思われる地名です。鍋を作った鉄の原料は砂鉄？磁鉄鉱？千種町では磁鉄鉱も採れることが確認されています。

従来土鍋ではなく鉄製の鍋が作られたことは、一般の人々に大きな恩恵を与えたことでしょう。



金屋子神



千種の磁鉄鉱

参考資料

金屋子神 (かなやごのかみ) 降臨の地 看板 平成25年設置 岩野辺自治会
日本の地名 谷川 健一 1997年 7月 1日 岩波書店